

春分を過ぎ、北極圏の夜がゆるやかに短くなり始めるころ、オーロラは冬とは異なる表情を見せるようになります。この写真に広がる紫色の光は、春先特有の繊細で高層の発光が重なったものです。一般にオーロラは、太陽から放出された高エネルギー粒子が地球の磁力線に導かれ、大気中の原子や分子と衝突して光る現象ですが、その発光色は衝突する高さや気体の種類によって変わります。低い高度では酸素による緑色が支配的ですが、より高い高度では窒素分子やイオン化した窒素が関与し、赤や紫の光が現れます。

春のオーロラでは、この高高度の発光が相対的に目立ちやすく、結果として紫色のベールや柱状の光が夜空に立ち上がります。写真右側に見える細い光の筋は「オーロラレイ」と呼ばれ、磁力線に沿って粒子が流れ込む様子をそのまま可視化したものです。また、地平線付近にはまだ夕暮れの名残があり、完全な暗夜ではないことも春の特徴の一つです。凍った湖と残雪の風景に、この淡い紫と緑の光が重なることで、冬と春の境界にあるわずかな季節の移ろいが感じられます。

このような光景が見られるのも、北緯高緯度地域のオーロラシーズンが終わりに近づく短い期間だけです。まもなく白夜が訪れ、夜空そのものが消えていく中で、この紫のオーロラは、季節の幕引きを静かに告げているのです。

(2026年4月中旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測)

